

課題を自分事ととらえ、主体的に解決に向かう児童を育てる国際協働学習の実践
(小学校総合的な学習の時間)

安城市立作野小学校 二村 彰久

1 学年・単元名

6年「Many Lands One World つながろう！世界の友達」

2 実践の内容

6年生の総合的な学習の時間の取り組みとして、一般財団法人ジャパンアートマイルが主催する国際協働学習プロジェクトに、学級で参加した。このプロジェクトは、日本と海外の児童生徒が電子掲示板の利用を基本に、テレビ会議などインターネットを活用して共通の学習テーマで国際協働学習を行うものである。海外のパートナー校の児童生徒とともに、SDGsの17の目標からテーマを選び、地球の未来のあるべき姿や課題について議論しながら学習を進める。学習の成果として、世界に訴えるメッセージを込めたアートマイル壁画（1.5m×3.6mの大型絵画。キャンパスの半分を日本の児童生徒が描き、残りの半分を海外の児童生徒が描くもの。）を共同制作する。

私の学級は、インドのSuncity Schoolの同年代の25名の子どもたちとともに、SDGsの目標14「海の豊かさを守ろう」について、意見交換を行いながら、世界に発信したい共同メッセージを考えたり、アートマイル壁画制作を行ったりした。



キャンパスの半分を描いた壁画と子どもたち
「さあ！インドに壁画を送ろう！」

3 実践の工夫・改善について

6年生の子どもたちにとって、遠く離れたインドの子どもたちと意見交換をすることや、地球環境について考えることは、経験がない上、実生活からかけ離れたものである。子どもたちがこれらの事象を自分事としてとらえ、主体的に学習に向かっていくために、次のような工夫をしながら実践に取り組んだ。

(1) 子どもたちが誇りに感じている地域素材をテーマに

かつて「日本デンマーク」とも呼ばれる農業先進都市であった安城の農業は、学校のすぐ隣を流れる明治用水の豊かな水に支えられてきた。子どもたちは、そんな明治用水を誇りに感じていた。学区には明治用水会館や水の環境学習館があり、5年生までの総合的な学習の時間でも水の大切さを考えてきた。また、これまでの学習の中で、三河湾にスナメリが息していることを喜びに感じていたことから、SDGsの目標のうち、目標14「海の豊かさを守ろう」をインドの子どもたちとの協働学習のテーマとして取り上げることが決めた。

(2) 協働学習のパートナーではなく友達に

日本とインドの子どもたち、それぞれ3～4名ずつで小グループを構成し、電子掲示板にそれぞれのグループの部屋を作り、互いの国の文化を紹介し合ったり、自分の趣味や興味のあることを話題にしたりすることができるようにした。また、テレビ会議の際、協働学習にかかわる意見交換だけでなく、レクリエーションを楽しむ時間を計画したり、キャンパスとともに手作りプレゼントを同封して送ったりした。このように、友達として、より身近な存在となれるよう活動を工夫した。

(3) タブレット端末（iPad）をコミュニケーションツールに

インドの友達との交流にあたり、学級の子どもたちにとって大きな壁となったのは、ICT機器の使い方と言語であった。電子掲示板での交流にあたり、タブレット端末を使用する際の投稿記事の作り方、写真や動画の貼り方、投稿の仕方を習得する時間を十分に確保した。また、翻訳ソフトの使い方を学習することで、英語を使ったコミュニケーションへの抵抗感を減らすことができたようにした。

(4) インドの友達の気持ちに寄り添う心をモチベーションの柱に

Suncity Schoolは、大気汚染が深刻な問題となっている首都デリーのほど近くに立地する。交流中には、大気汚染のため何度か休校となった。また、Suncity Schoolの近くを流れるヤムナ川は、最も神聖な川の一つとされる一方で、水質汚染が著しく、「死の川」と揶揄される。インドの子どもたちは、大気や河川の汚染を改善するための取り組みを調べ、自分たちにできることを真剣に模索していた。「自分たちがSuncity Schoolに通う立場だとしたら…」インドの友達が身近な環境問題に苦しみ、悲しみ、立ち上がろうとする思いを共感的に理解できるよう、インドの子どもたちの思いを、学級の子どもたちに伝え続けた。

4 評価方法の工夫

この実践における評価の目的は、子どもたちの習熟度を把握することで、指導の改善点を見出し、より充実した活動を展開することに主眼を置いた。

(1) 知識・技能

SDGs、インドの文化、三河湾の水質や生態系等の知識はインドの子どもたちとの協働学習における基礎知識となるため重要視した。一人調べの成果や、その発表会の感想等から評価を行った。不十分だと感じた事項、協調したい事項については、学びの足跡掲示や朝の会での話題に取り入れた。

また、翻訳ソフトの使い方を含めた ICT 機器の活用技能についても、インドの子どもたちとの交流のモチベーションに直結するため、個々の能力を把握しながら、個別に支援を行った。

(2) 思考・判断・表現

海洋・河川の汚染について、整理・分析を行う話し合い活動において、日本とインドそれぞれで起こっている汚染の原因と人々の暮らし方を結び付けて考えることができているかを評価した。また、両国で起きている問題の原因の相違点、共通点を見出すことができているかの評価を行った。これらの思考は、環境保全のために自分に何ができるか、インドの友達にどう自分の考えを伝えるかにつながると思った。この評価をもとに、その後の個々の活動において、適切に助言を行うことができるように心掛けた。

(3) 主体的に学習に取り組む態度

電子掲示板への書き込みの回数や内容についてチェックし、グループごと、または個別にアドバイスを行ってきた。また、心温まる電子掲示板での交流ができているグループの記事を紹介することで、全体の意欲向上につながった。電子掲示板への取り組みの他、プレゼント作りや壁画のデザインづくり、インドの文化、三河湾の水質、県内の海洋環境保全への取り組みなどへの調べ学習に取り組む姿勢を褒めることで、さらなる意欲が生まれるように努めた。



完成した壁画

「Connect to the Future! Our Planet and Our Smiles!」

5 成果と課題

(1) 成果① 地域素材を生き生きと紹介する子どもたち

5年生までの社会科や総合的な学習の時間において、明治用水や水の大切さに関わる学習に力を入れてきた子どもたちは、水の恵みとともに発展してきたふるさとの歴史や、栄養豊富で命溢れる三河湾について、インドの友達にいきいきと紹介した。英語での発表という高い壁があったものの、伝えたい思いが強く、難しい挑戦にも楽しみながら取り組んだという印象をもった。また、美しい三河湾を保っていききたいという思いから、自分たちにできることをこつこつと行う大切さを実感した。ひいては、そのような行動が、世界の海を取り巻く環境問題解決のための大切な第一歩となるという実感につながった。

(2) 成果② インドの友達一人一人を名前呼び、インドの友達を喜ばせようとする子どもたち

少人数のグループ分けによる電子掲示板での交流を通し、子どもたちは次第にインドの友達への親近感を感じるようになった。休み時間に交流の内容を教師に報告に来るときも、「ローハンが送ってくれたお祭りの写真すごいよ」「アナシュカが本を紹介してくれたけど、日本でも読めますか」など、個人の名前が出てくるようになった。また、環境保全に向けて自分たちにできることについての話し合いの時間にも、「アインドリちゃんの発表に出てきたヤムナ川の浄化運動のことなんですけど…」という発言が聞かれるなど、「インドの子」ではなく、個々を一人の友達として認識していることがわかるようになった。そして、本当の友達になりたいと願う子どもたちにとって、どんなテレビ会議でどんなゲームをするのか、何をプレゼントするのかなどを考える話し合いは、活発に意見が飛び交うものとなった。壁画のデザインについても、インドの友達の思いをふんだんに取り入れようと、国境を越えた意見のやり取りを進んで行う姿が見られた。

(3) 成果③ ICT 活用技能が向上した子どもたち

インドの友達とつながるツールとして、タブレット端末を活用する必要性を感じた子どもたちは、積極的に記事を作成したり、インドの友達からの記事を和訳したり、使い方を友達同士で教え合ったりしながら、みるみるうちに使いこなすようになっていった。この取り組みを通し、子どもたちの ICT 活用能力は、格段に向上したととらえている。

(4) 成果④ インドの大気や水質の汚染に胸を痛み、地球環境の改善の大切さを理解する子どもたち

Suncity School が大気汚染のため休校となった際、子どもたちはショックを受けた。自分たちもコロナ禍での長い休校を経験しているだけに、登校できない寂しさを知っている。インドの友達の気持ちを思い回るとともに、デリーの大気汚染が早く改善されることを心から祈った。インドの友達の気持ちに思いをはせることで、健康と環境が密接に関わりあっていることに気付いた。また、それはインドだけにとどまらず、よりよい地球環境を願う気持ちに国境はないこと、自分たちもインドの友達と同じ思いをもっていることに気付くきっかけになった。そして、ヤムナ川の汚染に胸を痛めているインドの友達の気持ちを考えることで、自分たちの地域の身近な海や河川が美しく命あふれるものであってほしいと願うのと同じように、ヤムナ川が美しい川であってほしいと願うようになった。

(5) 課題

インドの友達との交流に際し、子どもたちにとって高い壁となっていたのは、英語と ICT 機器活用であった。担任である自分自身もその両方に自信をもてずに交流に取り組んでいた。校内の ICT 活用に長けた先生や、英語の先生などの多大なご協力があったこそ今回の実践であった。英語教育も情報教育も、インドは日本のはるか先を走っていると感じた。ICT 活用能力と英語力は、私自身のスキルアップが課題であると同時に、日本の教育の課題であると感じている。